

【一】 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。「一」内の表現は、直前の語の意味を表します。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

① 水を感じさせるために水を省いた枯山水は、日本人の持つ「引き算の美学」を端的に表している。

【X】 や盆栽でもそうだ。ぼくたちはたった十七字というささやかな文字列の向こうに広大な風景を思い描き、小さな鉢と草木から時間の移ろいや、そこに吹く風、いつか見た自然の光景すら想起する。

何かを表現する際に、それをそっくりそのまま表すのではなく、余計な情報をあえて省略することで、かえって脳内のイメージを補完しやすくする、ということができるのだ。

② 落語もまた、そんな「引き算の美学」に満ちている。

ご存じのとおり、一般的に落語は、和服姿の落語家が座布団の上に正座をした状態で演じられる。舞台の上にはちよつとした屏風があるくらいで、大掛かりな舞台セットの類は置かれぬ。そのため、かえって場所は制限されなくなり、自在な場面転換が可能となる。

落語家の背後に立てられた屏風は、見映えもさることながら、擬似スクリーンのようにお客さまに風景を想像しやすくさせる働きもあるのだらう。

また、和服姿で演じることは衣装の省略にほかならない。役柄に即した特定の衣装を使用しないことで、さまざまな役柄を違和感なく演じわけることができるようになるのだ。

舞台セットや衣装の省略に比べると気づきにくいけど、じつは落語という表現方法は、とても大きな要素を省略している。

正座姿で演じることによって生じる「下半身の省略」である。

落語家は正座することによって、舞台上で全力疾走を表現することができる。

立っている状態で全力疾走するとしたら、ある程度の距離が必要だらう。また、全力疾走すると、すぐに舞台袖へと到達してしまふ。もちろんその場の足踏みで表現することもできないが、違和感が残るだらう。

それが、落語の場合は、正座した状態で腕を振ったり体を揺らすことですねんり全力疾走を表現することができるのだ。お客さまのほうで省略された下半身を補完して、速く走っているように思い描いてくれるからである。

落語という手法を用いれば、百メートルを九秒台で走ることとたやすいし、さらには、現実にはありえないような超高速で走ることだって可能だ。

そこにはたちまち赤鬼が出現する。

ありとあらゆる空想上のモノや状況を、落語を使えば簡単に具現化できるのだ。

「あつ、UFOだ」と言えば、そこにはUFOが出現する。

「UFOが首都高を走ってるの、初めて見たよ」と言えば、空を飛ばずに地面を走っているタイプのUFOを出現させることだってできる。

もちろん、演者の力量や対象の種類、観客それぞれの想像力などによってどれだけくつきり具現化させられるかの差はあるけれど、人魚もケンタウロス（ギリシャ神話の怪物）も、鼻の穴が三つある人間も、往年の福本豊（元プロ野球選手）も、とにかくありとあらゆるものを具現化することができるのだ。

とはいえ、落語では具現化しにくいものもある。

どんなものなら具現化させやすく、逆にどんなものなら具現化させにくいかについては、落語以外の表現方法を参照することで自ずと浮かび上がってくる。

たとえば漫画と比べてみたらどうだろう。日常にはありえない不条理な空間を描くにあたって、漫画もまた、とても優れた表現方法の一つである。

ぼくはへ 中略 ーギャグ漫画が昔から大好きで、ネタづくりに影響を受けてきたのだけど、ギャグ漫画を読んでいると、落語では表現できそうにないものがたまたに出てくるのだ。

それは、「得体の知れないもの」である。

落語では、具現化したいものについて落語家がしゃべり、その言葉を頼りに観客が頭のなかでそれを映像化することにより、さまざまなものが浮かび上がってくる。一方で、漫画は、漫画家が具現化したいものを絵として描く。読者はそれをただ眺めるだけでよい。

つまり、漫画では漫画家が描くだけでいいのだが、落語では、④落語家と観客が共通言語を有していないと空想が具現化されることはない。どういうものなのか？ どういう状況なのか？ そういったことが想像できるものでないかぎり、頭のなかで映像を浮かび上がらせることはできないのだ。

だから、「得体の知れないもの」を落語で表現するのは難しい。

落語でも、具現化したい得体の知れないものを、既知のものの組み合わせに分解することでも何とかイメージを伝えることもできなくはないが、絵にすることで一発で具現化できる漫画に比べると、どうしてもB分が悪い。たとえば大喜利の手法でよくある、「誕生日プレゼントにこんなものを渡すなんて。さて、どんなもの？」というようなお題の解答として、得体の知れないものを描いて「こんなもの」と答えるようなボケは、落語ではやりにくいのだ。

また、下半身を省略することで空を飛んだり、宙ぶり状態であったりという、空中での表現もしやすくなる。とくに空中での表現は舞台に足が着いていると表現しにくいものであるけど、下半身を省略した落語であれば、地面から足の浮いているイメージがお客さまの頭のなかでもスムーズに補完されやすくなる。

さらに落語では、登場人物が自在に座ったり立ったりを繰り返すことがよくある。これも、③立ちながらでは座っている状態を表現するのは難しいが、その逆、つまり、座りながら立っている状態を表現するのは、さほど難しいことではない。

こう考えてみると、「正座」は、落語にとっても重要なものである気がしてくる。

下半身を省略することは、漫才やコント、演劇などほかの表現方法ではほとんど見られないものであるからだ。

であれば、「現代が舞台の新作落語」を表現する際にたまに用いられる、「スーツ姿でイスに座って話す」というスタイルは、そもそもの落語とは似てAビなるものだとすることが理解できるだらう。

現代人にとって身近で、かつ最低限の正装でもあり、さらに特定の意味合いを持たせず無機質なニュアンスも含んだスーツ姿というのは、ある意味で落語における着物姿と同じ役割を担えようではあるけど、スーツ姿と相性のいいイスについては、下半身を固定するといつても、正座ほどの「下半身の省略」効果は得られないから

だ。

そう考えると、違和感なく正座することができ、なおかつフォーマルさも兼ね備えた着物姿は、落語にとつての必要条件なのかもしれない。

（中略）

繰り返し書いているが、落語の一番の武器は「何にもないから何でもある」こと。そもそも日常ではありえない不条理な空間を描いた笑いが好きなくが落語に魅かれた理由も、この点につきる。

そこで、この特性について、さらにもう一歩踏み込んで考えてみたいと思う。「何にもないから何でもある」ことで、どういう表現が可能になるだろうか。

まず、思いつくのは空想の具現化だ。

第一章でも書いたように、落語では、いとも簡単に赤鬼を生み出すことができる。

「おい、見てみろよ。赤鬼さんだ」

「ほんとだ」

落語家がしゃべり、それを聞いた観客がそれぞれの頭のなかに赤鬼を描いた瞬間、

逆に、漫画では具現化しにくいけど、落語では具現化しやすいものもある。

たとえば、「往年の福本豊」を漫画で表現しようと思ったら、往年の福本豊のすべを絵にする必要があるけど、落語の場合は「往年の福本豊」と言葉にするだけで、観客が福本豊を知ってさえいればそっくりそのままイメージを起すことができる。

または、第一章の「幻想マクラ」の箇所为例にあげた「寝ないカレー」の話なども、ディテール（細部）を観客に委ねられる落語だからこそ表現できる面白みだらう。

言うまでもなく、このマクラ（本題に入る前の短い話）の肝はカレーの擬人化にあるのだけど、漫画でこれを表現しようとするとうすら寒くなってしまうのではないか。カレーを完全に人型の造形にしたとしても、スライムのような個体と液体の間のような造形にしたとしても、どうにもしっくりこない。

落語であれば、造形をきっちり固める必要がないぶん、そのつど人型であったり、スライム状であったり、それこそ鍋を含めた造形であったり、描きたいシーンによってその形状を都合よく変化させることが可能だ。落語なら「寝ないカレー」という認識にゆとりをもたせられるのである。

つまり、まとめるならば、漫画はY からこそ、不条理な空間を描くことに長けており、一方で、落語はZ からこそ、不条理な空間を描くことに長けている。

こうも言えるだらう。落語は演者と観客とが共通言語を有していないと空想の具現化ができない。であるからこそ、ノーモーションで得体の知れないものを表現するのでなく、イメージの湧きやすい言葉同士の思いがけない結びつきによって不条理な空間を描き出すことになる。

たとえば立川談志は、落語の「イリュージョン」という概念を説明する際に、「縁の下で飼っているキリン」のようなフレーズを挙げていたが、まさにイメージの湧きやすい言葉同士の思いがけない結びつきがもたらす空想の具現化であり、つまり、それは⑤落語という表現の理に適ったものであった。

（立川吉笑 著『現在落語論』より）

問1 太線部A「ヒ」・B「分」・C「委(ね)」について、カタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問2 傍線部①「端的に」の意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア そのまま    イ くわしく    ウ はつきりと    エ あいまいに

問3 空欄Xに入る文学のジャンルとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 詩    イ 短歌    ウ 小説    エ 俳句

問4 次の表は傍線部②中の「落語」における「引き算の美学」についてまとめたものです。空欄I～VIに入る適切な表現を1ページの本文中からそれぞれ指定された字数で抜き出し、答えなさい。

|        | 引き算の仕方                        | 引き算による効果                      |
|--------|-------------------------------|-------------------------------|
| 舞台装置   | 大掛かりな舞台セットを置かない。              | 【I 二字】の制限がなくなり、【II 七字】が可能となる。 |
| 衣装     | 常に【III 二字】を着用し、他の衣装は着ない。      | 【IV 十八字】ことができる。               |
| 落語家の体勢 | 【V 二字】の状態で演じることで【VI 三字】を省略する。 | さまざまな場面や動作を自由に表現できる。          |

問7 空欄Y・Zに入る最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア 得体の知れないものを完全な状態で具現化できたり、細部まできっちり描写しきれる

イ 細部まで表現し、より具体的なイメージを相手に抱かせることを言語によって目指す

ウ 細部までは描写を固めず自由な発想をさせることで、あらゆるものを完全に具現化できる

エ 細部を表現しきらなくともざっくりとした印象のままあらゆるものを言語的に具現化できる

オ ざっくりとした描写をすることで相手の視覚と聴覚に直接的に働きかけ想像力をかきたてる

問8 次のア～オは傍線部⑤「落語という表現」について説明したものです。説明として適切なものにはAを、適切でないものにはBを書きなさい。

ア 細部まできっちり表現し観客に同じイメージを持たせることで、共通する面白みを作り出すもの。

イ 重要な情報をあえて省略し、観客一人ひとりのイメージを呼び起こすことで話を展開させていくもの。

ウ 舞台や衣装など多くを省略し、落語家の話術に集中できる環境を整えたうえで観客のイメージに訴えかけるもの。

エ 事細かに描写しなくても、イメージを生み出す言葉の力によって演者の脳内に描かれている情景を観客と共有するもの。

オ 正座しながら全力疾走を表現したり、得体の知れないものを登場させたりすることで、観客に不条理な空間を味わわせるもの。

問5 傍線部③「立ちながらでは」難しいことではない」とありますが、このような違いが生じるのはなぜですか。その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 落語家が座っている時のほうが、立っている時よりも観客がイメージを補いやすくなるから。

イ 落語家が立っている時のほうが、座っている時よりも観客が具体的にイメージしやすくなるから。

ウ 落語家が座っていると、立っている時よりも観客がイメージすることへの意欲を持ちにくいから。

エ 落語家が立っていると、座っている時よりも観客がイメージすることへの意欲を持ちやすいから。

問6 傍線部④中の「共通言語」とはどのようなものですか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 意思の表明や情報伝達に使用する言葉。

イ 生活体験の中で触れてきた文化や教養。

ウ 落語の中でやりとりされる会話や仕草。

エ 落語を楽しむために必要な事前の知識。

二 次の文章は、ささきあり著『天地ダイアリー』の一節です。本文を読み、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文を変更している部分があります。

翌朝、ぼくは少し迷ったものの、マスクをつけるのはやめた。不安が強くなったらいっつもつけられるように、ジャージのスボンのポケットにつっこむ。

「いってきます」

「いってらっしゃーい！」

ハハの能天気な声に背中を押されて、ぼくは玄関を出た。

昨日、菊池さんに「いいね」なんて言われて舞いあがったけど、家に帰ってお風呂につかったら冷静になった。

菊池さんが言った「いいね」は、表情が見えるのはいいいね、という意味だ。別にぼくの顔がいいとか、ぼくに好意を寄せているという意味じゃない。

ぼくだって女の子にかっこいいと思われたという願望がないわけじゃないから、つい浮かれてしまったけど、まあ、そんな好意的なこと、この先も言われることはないだろう。

それでもマスクをはずして登校する気になったのは、菊池さんの言うとおり、表情が見えないのは、とっつきにくいだろうと思ったからだ。

マンガによくある、①仲間と強い友情で結ばれるという世界に憧れていた。でも、どうしたら、そんな友だち関係が築けるのかわからなかった。自分には無理だと、あきらめていた。

マンガのようなことは、自分には起きない。ありえないことを期待するのはやめて、現実を見よう。空回りして人から冷たい目で見られるぐらいなら、傷つかない場所について、当たりさわりのないつきあいをするのが一番いい。

——そう思っていた。

『本当にダメなときは自分のことで精一杯で、植物まで気が回らない……』

早川先生の言葉が、耳によみがえる。

あのとき、ぼくは小学生のころよりはマシになった気がしていた。

でも、そうじゃなかった。やつぱり、いまでもぼくは、自分を守ることで精一杯だ。菊池さんみたいに、当たって砕ける勢いで友だち関係を築くのは、ぼくには難しい。

けど、一歩だけ、自分の枠から外に出てみたいと思った。

植物栽培は、相手を知らなければ育めない。

たぶん友だち関係も同じだろう。相手を知らうとすることと、心を開いて自分を知ってもらう努力をしないと、親しい関係なんて築けない……んじゃないかな。

エレベーターのドアが開くと、ぱあっと、明るい日射しに包まれた。深夜まで降っていた雨が上がり、雲の間から日が射している。

② ぼくは、歩道の水たまりを避けながら歩いていった。

ドクン、ドクンと、心臓が音をたてる。

ポケットに手を入れてマスクに触れた。大丈夫、まだ行ける。

横断歩道を渡ると、フェンスの向こうにグラウンドが見えた。水色のジャージを着た生徒たちが、グラウンドにしゃがんでいる。体育委員が水たまりの泥水をぞうきんで吸い取っては、バケツにしぼっているようだ。

花壇はどうなっているだろう。

ぼくは鼓動が速くなるのを感じながら、正門に近づいた。ブルーシートに水たまりができているものの、花と葉はしゃんと上を向いている。

よかった。へたつてない。

シートの上にたまっている雨水を流そうとブルーシートに手をかけると、パタパタとかけよってくる足音がした。

「水を流すの？」

工藤がとりに立って、ブルーシートをにぎった。

「ああ、ありがとう。頼む」

マスクをとったぼくの顔を見て、工藤が言った。

「花粉症おさまったの？」

「うん、まあ」

「よかったな」

やさしい声だった。これまで工藤からマスクについて聞かれたことはなかったけど、気にしてくれていたのかな、と思った。

ぼくたちは右側の花壇のブルーシートを持ちあげて、たまった水を流してからはずした。ほわあと、少し甘いような花の香りが広がる。

ああ、この花はこんな香りだったんだ……。

左側の花壇もやろうと移動すると、ふとまゆセンパイがやってきた。

「よー、諸君。さわやかな朝だねえ」

当たり前のように、ぼくたちとブルーシートをはずす作業をする。そして、工藤を手まねした。

「工藤くん、見た？ ニチニチソウ46」

「は？」

首をかしげる工藤の肩に腕を回して、歩道の花壇に誘導する。

よかった。こつちも大丈夫なようだ。

ぼくはひとまずブルーシートをベランダに置き、スクールバッグを机に置こうと引き返した。

と、教室の後ろに立ってかけられたクラス看板が目に入った。

翼を広げたユニコーンが空を飛んでいるイラストに、「跳べ、かけろ、1-A!」というコピーが入っている。

いろいろあって忘れていたけど、この看板が仕上がらないから手伝ってほしいって言ってたよな。できあがっているように見えるけど、どうなんだ？

ぼくが見入っていると、兼家さんがそばに来た。

「いいでしょう？ 手伝ってくれた人のおかげ」

そっか。ちゃんと手伝った人がいたんだ。SOSを出せば、助けてくれる人がいる。バラバラでまとまっているとは言えないけれど、そんなに悪いクラスではないのかもしれないな。

「そういえば、花、大丈夫だった？ 昨日、栽培委員会で正門の花壇にシートをかけていたでしょう」

おどろいた。クラスの人にも見られていたのか。

「あ、うん。いまのところは大丈夫そう。様子を見ないと、わかんないけど」

④ 「大丈夫だいいね。花が育っていくのを見ると、気分が上がるもんね」

すうっと、胸のあたりが軽くなった。詰まっていたなにかが取れたように。花を見てくれている人がいたんだ……。

兼家さんは「あ、よっちゃん、おはよー」と手をふって、友だちのところへ行っってしまった。ひらひら飛びまわってチョウみたいな人だなと思いつつ、ぼくは大きく息を吸いこんだ。

それから工藤に手伝ってもらってベランダにブルーシートを干していると、早川先生が教室に入ってきた。日直の号令で、みんながいさつしている間に席につく。すると、岡本が手をあげた。

「先生、ちょっといいですか？」

「どうぞ」

岡本は立ちあがって、みんなを見た。ふーと息を吐く。

「おれ、勝たなきゃって、強く思いすぎていました。いろいろきついこと言っ、すみませんでしたー」

しんと、教室が静まりかえった。

まもなく、ギツと、イスを引く音がした。立ちあがったのは及川さんだった。

「ほら。この子たち、チョウが羽を広げて集まっているみたいだろう。ひらひらした感じが、かわいいよなあ。しかも、かわいいだけでなく、夏の高温多湿を耐えぬく強さを秘めている。かわいさと強さをあわせ持つ、まさにトップアイドルだ」

ふとまゆセンパイは言いながら、満足げにうなずいた。

「なかでも、わたしの推しフラワーは、この子。ニチニチ美香だ」

ずらりと並ぶ花のうち、薄いピンク色の花を指す。

ぼくは、ぶっと、ふきだした。

工藤がとまどいがちに、うなずく。

「はあ、かわいいっすね」

「そうか、わかるか。キミは園芸の心を持つ逸材だ」

ふとまゆセンパイは、ぼんぼんと工藤の肩をたたいて、正門に入ってしまった。

あー、すげーな。

ふとまゆセンパイは、だれとも壁をつくらない。それに一見ふざけているようで、実はしっかり花の特徴を伝えている。ぼくみたいに委員会カーストの下のほうだなんていじけることなく、栽培委員会の活動を堂々と宣伝しているようにも見えた。

工藤が細い目を見開いた。

「おもしろいセンパイだな」

ぼくは笑って、うなずいた。

「すげー人なんだよ」

笑いながら、ふと、心臓の音が落ちついていることに気がついた。

大丈夫だ……。マスクがなくても、平気だ！

ぼくは勢いづいて、工藤に言った。

「なあ、工藤。運動会の振替休日、映画に行かない？ 工藤が話してた『陽炎前夜』が観たいんだけど……」

工藤がくしゃつと、人のよさそうな笑顔を見せた。

「おー、いいね。行こ行こっ。おれ、友だちと映画に行くのはじめて。親か兄貴としか行ったことがないんだ」

「ぼくも、友だちと行くのはじめてだよ。楽しみだな」

③ しゅわーっと、はじけるものが胸のなかに広がった。

一歩ふみだせた手応えと安堵。こういうのを重ねていけば、友だちとのつながりが強くなっていくのかな。

教室に入ると、菊池さんと及川さんがにこやかに話していた。

「わたしは……楽しくやることしか考えていませんでした。きついこと言っ、みんなに嫌われたくなかったから。でも、それは岡本さんの言うとおり、リーダーの役目を果たしていないことでした」

「いや、言いすぎた」

岡本がすまんと、頭を下げる。及川さんは、首を横にふった。

「わたしはリーダーに向いてないと思います。でも、中途はんばに投げだして、後悔したくないと思いました。降りるって言ったけど、やっぱり最後までやりとしたいです。勝手なことばかり言っ、ごめんなさい。でも、お願いします」

「なにか意見は、ありますか？」

早川先生が見まわすと、菊池さんが手をあげた。

「及川さんに、リーダーをやってもらいたいです」

ほとんどの女子がうなずいた。早川先生がメガネを押しあげる。

「じゃあ、決まりですね」

④ X とはじまった拍手の音が広がっていき、教室中にびびわたった。

晴れやかな笑顔で早川先生が言った。

「では、全員ぞうきんを持って、グラウンドに集合してください！」

ぼくたちはグラウンドに出ると、たまった雨水を吸い取る作業にくわわった。

運動会の開始は、一時間遅れの十時になった。

（中略）

それから、プログラムはスケジュールどおりに進んでいき、前半最後の種目、ムカデ競走になった。

入場門から列になってフィールドに入り、女子チームは本部テント側、男子チームは生徒観覧席側に進んだ。

ぼくたちはトラックに出て、足にひもをAくわえて、前の人の肩に手を置いた。

先頭の岡本が後ろを向いた。

「準備できたかー？」

みんながうなずくと、岡本はにっこり笑顔を見せた。

「よーし。一年A組、いくぞー、楽しむぞー」

「おー！」

みんながこぶしを突きあげた。

パーン！

ピストルの乾いた音がびびき、わーっと歓声がわきあがる。

A組の女子はスタートダッシュこそ遅れたが、コーナーを曲がったあたりから

「Y 盛り返してきた。女子が近づいてきたのを見て、岡本が声をあげた。  
「せーの！」  
男子全員が足ぶみを始める。

「いち、に、いち、に！」  
女子チームがぼくたちの横にやってくる。及川さんが岡本にバトンを渡してさけんだ。

「頼んだよー」  
「おう！」

ぼくたちは、少しずつピッチをあげていった。岡本が前に行くC組の最後尾をとらえる。まわりの歓声がひととき大きくなった。

「いける！」  
さらに声を張りあげて、足を動かした。C組の横に並ぶ。

が、先にゴールのテープを切ったのは、C組だった。

ぼくたちは一足遅れてゴールを駆け抜け、トラックからフィールドに入って止まった。足首のひもをほどいていると、女子がわらわらと集まってきた。

「惜しかったねー」

「もう少し距離があれば、絶対に抜かせたね」

興奮ぎみに、女子たちが話す。

岡本は及川さんと顔を見合わせて、へへっと笑った。

「まあ、がんばったよな」

及川さんもうなずいた。

「うん。がんばった。悔いなし」

両腕を上げて、うーんと伸びをする。

みんなも、「そうだ、そうだ、がんばった」と言いあつた。

菊池さんが、仲のいい女子と声を合わせてさげんだ。

「リーダー、ありがとう！」

みんなからも、「ありがとう」「おつかれさまー」という声が飛び、拍手が起きた。岡本と及川さんは、照れくさそうに笑顔で応えていた。

午後は全校女子のチアダンス、男子の組み体操など、見応えのある種目が続き、最後の選抜リレーで、最高潮の盛りあがりをみせた。

一年A組では阪田や岡本たち体育会系の男女が出場して、クラスの観覧席をわかせた。体格のいい先輩たちの走りはダイナミックで、ぼくは目の前をかけていくス

少しして、川口センパイとふとまゆセンパイもやってきた。

「どう？」

川口センパイに聞かれて、ほんわかせんばいは浮かない表情で答えた。

「いまのところは元気だけど、土は湿っている。根っこがダメにならないといいんだけど……」

「そうだね」

川口センパイの声のトーンが下がり、ぼくの気分も下がった。

根がどうなっているかは、確かめられないもんな。

そこへ、菊池さんが阪田を連れて戻ってきた。

「ハサミ、持ってきましたー。って、なんかありました？」

「ちよっと掘ってみたんだけど、やっぱりかなり水分を含んでいるみたい」

ほんわかせんばいが、左側の花壇の土を指した。穴の奥に少し水がたまっている。

このまま水が抜けなかったら、根は腐る……。

そのとおりなんだけど、なんか気持ち引かかった。

「花が育っていくのを見ると、気分があがる」と、兼家さんは言っていた。

園芸の楽しみは、植物が育っていく姿を見ること。楽しいから、もつと世話しようと思うのに、<sup>⑥</sup>枯れるかもしれないとピクピクしていたら、つまらないよな。

「あの、ほんわかせんばい」

ぼくは、ほんわかせんばいをまっすぐに見た。

「もしも枯れたら、冬を待たずに土壌改良しましょう。そこに挿し芽を植えましょう」

みんながぼくと口を開けた。その表情を見て、血の気が引いた。

やってしまった。また空回りか？

逃げだしたい気持ちでいると、あはははと、川口センパイが笑いだした。

「ほんわかせんばいだって、涼音にぴったりー」

へ？

さっき言ったセリフが、脳内でリピートされる。ぼつと顔が熱くなった。とっさに口もとに手をやり、マスクがないことに気がついた。

わー、無意識に言ってしまった。心の中のあだ名を、口に出してしまった。

みんなが、どっと笑う。

ふとまゆセンパイが自分を指した。

「ねー、おれは？ おれのあだ名は？」

ぼくは遠慮がちに答えた。

ピードや力強い足音に息をのんだ。

すげー、小学校の運動会とは迫力がちがう！

興奮冷めやらないまま、閉会式に突入。

総合優勝したのは、三年B組。歓喜にわくなか、列の間からふとまゆセンパイが阿波踊りのような手ぶりで、はしゃいでいるのが見えた。

一年A組は総合でなんと、三位になった。というのも、クラス看板が全学年で二位の優秀賞にかがやいたからだ。

発表を聞いて、A組のみんなだけでなく、早川先生も飛びあがった。

「やったー！」

「すごい」

拍手を受けて、兼家さんは涙ぐみ、クラスの女子と代わる代わるハグした。

ぼくは胸の奥から、熱いものがわきあがってくるのを感じた。こんなの、いままを感じたことがなかった。

団体競技は好きじゃなかったけど、楽しかった。来年は希望参加の種目にも出てみようかな。

<sup>⑤</sup>……なんて、柄にもないことを思った。

下校時、ぼくは剪定バサミを持って、正門の花壇に行った。

正門を出ていくクラスの男子数人に「おつかれー」と声をかけられ、ぼくは軽く手をふり返した。クラスメイトとふつうにあいさつを交わせるようになったことが、うれしかった。

右側の花壇の前に立ち、葉を手にとって見る。水につかった葉は、どれも泥がついていた。これは、切りとったほうがよさそうだ。

下のほうの葉を切っていると、菊池さんとはんわかせんばいがやってきた。

「花の具合はどう？」

菊池さんが心配そうに聞く。

「いまのところは大丈夫だけど、泥がついたところは、のぞいたほうがいいかなと思ってる」

ぼくの返答に、ほんわかせんばいがうなずいた。

「そうそう、病原菌を持った土が葉につくと、そこから感染して病気になるっていうもんね」

「わたしも、ハサミを持ってくるね」

菊池さんが小走りに校舎へ戻り、ほんわかせんばいは左側の花壇を見に行った。

「ふ……、キリッとした眉毛をしているから、キリマユセンパイとか？」

「キリマユ……」

ふとまゆセンパイが口もとに手をあてて、考えるしぐさをする。

ひつ、まっすぐだった？

ぼくがあとずさると、ふとまゆセンパイは親指と人差し指でVの字をつくり、あこの下にあてた。

「キリツマユツって感じ？」

眉毛をびくびく動かし、しゅい表情をつくって見せる。

みんなの笑い声が、さらに大きくなった。

ふとまゆセンパイが笑いながら、ぼくに言った。

「ネーミングセンス<sup>B</sup> バツグンのキミ。キミの名前はなんというんだい？」

「あ、木下ですけど……」

「いや、下の名前だよ」

「広葉、広い葉っぱと書いて、広葉です」

「ひろはー？」

ふとまゆセンパイが、目をまるくした。

え、そんなにおどろくこと？

ぼくがとまどっている、ふとまゆセンパイはにやつと笑った。

「木下広葉って、栽培委員会の<sup>Z</sup>のような名前だねえ」

ほんわかせんばいが、うなずく。

「うん、いい名前だよ。これからは、広葉くんって呼ばせてもらおうかな」

「わたしも」と、川口センパイが言い、菊池さんも続いた。

「そう呼んでいいよね、広葉くん」

ドキッと、胸が弾む。

幼稚園以来、はじめてだ。親や親せき以外で、下の名前で呼ばれたのは。なんか、こそばゆくて、うれしい。

問1 太線部A「ユ（わえ）」・B「バツグン」をそれぞれ漢字で書きなさい。

問2 傍線部①「仲間と強い友情で結ばれる」ためにはどのようなことが必要だと「ぼく」は考えていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 冷たい態度をとらず、話しかけてもらいやすい表情を作ること。

イ 相手に自分を知ってもらおうとし、こちらも相手を知ろうと努めること。

ウ 友達との距離感を大切にし、当たりさわりのないつきあいを心がけること。

エ 自分のことで精一杯にならず、一歩踏み出し勢いよく相手に働きかけること。

問3 傍線部②「ドクン、ドクンと、心臓が音をたてる」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとしてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 心配      イ 緊張      ウ 期待      エ 動揺

問4 傍線部③「しゅわーっと、はじけるものが胸のなかに広がった」から読み取れる「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで「ぼく」はマスクがないと不安で言いたいことを友達にすら言えなかった。しかし、思い切ってマスクがない状態で工藤に話しかけてみると、意外なほど上手に会話ができたので、これからはマスクなしで話ができると自信をつけている。

イ 今まで「ぼく」は友達と仲良くなりたかったと思っていながら、断られることが怖くて自分から声をかけられずにいた。しかし、「ぼく」からの映画の誘いを工藤が肯定的に受け止めてくれたことで不安がとけ、達成感とともにすがすがしい気分を味わっている。

ウ 今まで「ぼく」は家族としか映画を見たことがないので、友達と映画に行きたくても誘うことができなかった。しかし、思い切って工藤を映画に誘ってみると、工藤も友達と映画に行ったことがないと分かり、自分だけではなかったのだと確認し安心している。

エ 今まで「ぼく」は友達から「いいね」と肯定的な評価をもらうことがなかった。しかし、工藤を映画に誘ってみると、喜んだ表情で「いいね」と言ってくれたのでうれしくなり、自分も他の人と同じように工藤と友達関係を築けるのではないかと期待をふくらませている。

問7 傍線部⑤「……なんて、柄にもないことを思った」理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 今まで他人と力を合わせて物事に取り組むことをしなかった「ぼく」だったが、運動会でクラスが総合三位になったことに気をよくし、このクラスの一員になれたことを誇らしく思ったから。

イ 今までムカデ競走に対して面白くないと思っていた「ぼく」だったが、本番ではみんなで楽しく競技に臨めたうえに結果も惜しかったので、来年こそムカデ競走で勝りたいと意欲がわいたから。

ウ 今まで運動会は見応えのある競技がなくてつまらないと思っていた「ぼく」だったが、中学校の運動会は迫力ある競技が多くて興奮したので、来年は自分もそのような競技に出たいと思ったから。

エ 今まで他人と距離を置き、当たりさわりのないつきあいをしてきた「ぼく」だったが、クラスの人たちとの交流やムカデ競走への取り組みを通して、これまで味わったことのない充実感を得たから。

問8 次の文章は、傍線部⑥「枯れるかもしれないとビクビクしていたら、つまらないよな」という表現から読み取れる「ぼく」の考えをまとめたものです。空欄Ⅰに入る言葉を4ページの本文中から十一字で抜き出し、答えなさい。また、空欄Ⅱに入る言葉を自分で考えて二十～三十字で答えなさい。

「ぼく」は植物栽培に友だち関係の育み方を重ねている。

「ぼく」ははじめ、強い友情で結ばれることに憧れながらも「Ⅰ」で、友だちに対して積極的になれなかった。しかし、クラスメイトや先輩たちと交流するうち、植物が枯れたら土壌を改良して挿し芽を植えればいいうちに、Ⅱ「Ⅰ」ことが友だち関係を育むためには必要だと考えるようになった。

問9 空欄 Z に入る最も適切な言葉を次から選び、記号で答えなさい。

ア 弟子      イ 元祖      ウ 後継ぎ      エ 申し子

問5 傍線部④「すうっと、胸のあたりが軽くなった。詰まっていたなにかが取れたように」から読み取れる「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」は、花壇の花のことなど誰も見ていないし、その誰も見ていない花を育てる栽培委員会は委員会カーストの下の方だと思っていた。しかし、花や委員会の様子を気にかけてくれる人がクラスにもいると知り、いじけていた気持ちが薄らいでいる。

イ 「ぼく」は、クラス看板の制作を手伝っていないので、どのような看板になるか気がかりだったが、無事に看板ができあがったことが分かり安心した。そのうえ、自分が手伝わなくても手伝ってくれる人がいることを知り、クラスのみんなへの信頼を深めている。

ウ 「ぼく」は、クラス看板が仕上がらないときに声をかけられたのに手伝わなかったことを気にしていたが、クラスには助けてくれる人がいて看板は完成した。さらに兼家さんも「ぼく」が手伝わなかったことを気にも留めていないので、不安な気持ちが楽になっている。

エ 「ぼく」は、クラスのみんなの気持ちが運動会の練習やクラス看板の制作に向いていて、正門の花壇など気にもしていないと思っていた。しかし、兼家さんは花壇の花に注目していて、しかも花が育つ様子を楽しみにしていることが分かり、クラスメイトへの誤解がとけている。

問6 空欄 X・Y に入る最も適切な言葉をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は一度しか使えません。

ア いそいそ      イ もくもく      ウ じわじわ  
エ チラチラ      オ パラパラ

問10 「ぼく」にとつてのマスクの役割としてふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の表情から感情を相手にさとられないようにするもの。

イ 顔の一部を隠すことで、自分の存在を目立たなくするもの。

ウ 花粉症をよそおうことで、相手の関心を引こうとするもの。

エ 心の中の考えを不用意に口から出さないようにするもの。

問11 次の①～③は、それぞれの人物について説明したものです。ア～キから選び、記号で答えなさい。

① 飾り気がなくぶつさらばうな口調も見られるが、素直でさりげなく友達を気づかう優しさを持っている。

② ユーモアがあり、誰に対しても分け隔てなく交流することができ、自分の仕事に誇りを持っている。

③ 勝ちたい気持ちが行きすぎてしまう面もあるが、過ちを認める潔さもあり、リーダーシップを発揮できる。

ア 岡本      イ 工藤      ウ 菊池さん      エ 及川さん  
オ 兼家さん      カ ふとまゆセンパイ      キ ほんわかせんぱい

解答用紙

得 点

|  |  |
|--|--|
|  |  |
|--|--|

| 問<br>8 | 問<br>5 | 問<br>4 |    |    | 問<br>2 | 問<br>1 |   |     |
|--------|--------|--------|----|----|--------|--------|---|-----|
| ア      |        | V      | IV |    | I      | A      |   |     |
|        |        |        |    |    |        | ヒ      |   |     |
| イ      | 問<br>6 |        |    |    | 問<br>3 |        |   |     |
|        |        | VI     |    | II |        |        |   |     |
| ウ      | 問<br>7 |        |    |    |        |        | B |     |
|        | Y      |        |    |    |        |        | 分 |     |
| エ      |        |        |    |    |        |        |   |     |
|        | Z      |        |    |    |        |        |   |     |
| オ      |        |        |    |    |        |        |   | C   |
|        |        |        |    |    |        |        | 委 |     |
|        |        |        |    |    | III    |        |   | (ね) |
|        |        |        |    |    |        |        |   |     |
|        |        |        |    |    |        |        |   |     |
|        |        |        |    |    |        |        |   |     |

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ✖ | ✖ | ✖ | ✖ | ✖ |
|---|---|---|---|---|

[illegible]

|   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ✖ | ✖ | ✖ | ✖ | ✖ | ✖ | ✖ |
|   |   |   |   |   |   |   |